

父の病気

四月に引き続き、わたくしごとで、いつも読んでくださっている方には申し訳ありませんが、お許し下さい。私の父は第二次世界大戦のさなか、通信兵として訓練を受け、特攻機に乗り込む直前に終戦になり、除隊、学徒動員により軍需工場で働いていた母と結婚しました。私を長女とし、四人の子どもを、慣れない仕事をしながら苦勞して育てました。母の方が何倍もの苦勞があったとは思いますが。

子どもたちが独立してからは、大好きなアマチュア碁に毎日のように通い、カラオケにいき、家庭菜園で自慢の野菜を作っては、私たちに送ってくれたりしていました。

ところが、三年程前に、白血病の疑いがある、とかかりつけの医師に言われたので相談したい、と連絡がありました。急いで帰省しましたが、いつもと変わらず元気そうな父の言い分は、年が年なので、積極的な治療はしたくない、痛い検査は嫌だ、というものでした。大学病院に通っていてもその主張をし続け、経過観察のみ受けていました。帰省した折に骨髓のチェックをしていたのですが、何種類かの食物と添加物のアレルギーが骨髓に作用し、さらに非結核性抗酸菌の感染が起こっていたのです。アレルギーは、できるだけ除く、そして非結核性抗酸菌に対しては、オリーブ葉を服用してもらう、という方針で経過観察をしてもらっていたのですが、何と半年後にはすべて正常化して、通院する必要なし、となりました。

しかし、一年半もしてから再発、中断していたオリーブ葉を再開したのですが、九十歳を越えているためか、感染症等体調が悪く、白血球数も二十万近くなり血小板も二~三万になり、入院し、輸血をしていただくことになりました。そのうち輸血も不要になっていたのですが、睡眠薬を服用した後、ふらついて転倒、脳内出血を引き起こし、それも改善の兆しが、見えてきたときに肺炎を起し翌日に亡くなってしまいました。白血病自体は良くなり、白血球二万以下、血小板六万以上となり医師からも、これから慢性期に入りますから、と言われていたところだったのです。オリーブ葉が効果あったのかは、事故の為ははっきりしませんが、一度目の寛解期にオリーブ葉をしっかり続けるように言わなかったのが、心残りです。

美食家の父は病院食を嫌がり、許可がでる時は、家族が持ち込んだりしていたのですが、脳出血の後は鼻腔栄養にする話になっていたのです。きっとそれはご免被ると自分で決めたようでした。連休中に葬儀もすべて済ませられるように、子どもたちに配慮したんだな、とすぐ分かりました。

入院中、私の友人が著した「覚醒」という本を渡していたのですが、次に見舞った時、「全部読んで、全部判った。けど二十年前だったら、理解できなんだ。」「死ぬのは怖くなくなった。」と言ったのです。「わしゃ、一分一秒でも長生きしたいんじゃ。死んだら終いじゃ。」と言っていた父が、です。ぎりぎりに間に合いました。家族葬で心ゆくまで語り合い、父を送ることができました。「頑丈な体と素直な心をありがとうございました。」と棺に入れ、最期の感謝の言葉にしました。